

平成十八年十一月十一日(火)

第三六二回 史跡 めぐり 資料

建長寺で座禅体験

そして初冬の北鎌倉

越谷市郷土研究会

今日あるくところの関連略年表

1184	寿永3	頼朝、★大河土御厨を鎌倉に寄進。一の谷で平家敗る		
1192	建久3	頼朝、鎌倉幕府をひらく		
1199	正治1	頼朝没す		
1200	正治2	<u>寿福寺創建</u>		
1203	建仁3	北条時政、執権となる	1205	執権義時
1227	嘉禄3	★江南町・全国最古の板碑	1224	執権泰時
1245	寛元3	★慈光寺梵鐘（物部重光）	1242	執権経時
1246	寛元4	蘭溪道隆来日	1246	執権時頼
1249	建長元	<u>建長寺創建</u> ★越谷市・建長板碑		
1251	建長3	<u>円応寺</u> ・初江王像 時宗生まれる		
1255	建長7	建長寺梵鐘（物部重光）	1256	執権長時
1263	弘長3	時頼没す		
1268	文永5	時宗執権に。元使来たる	1264	執権政村
1274	文永11	文永の役	1268	執権時宗
1278	弘安元	蘭溪道隆没す		
1279	弘安2	無学祖元来日		
1281	弘安4	弘安の役		
1282	弘安5	<u>円覚寺</u> 創建。日蓮没す		
1283	弘安6	<u>淨智寺</u> 創建	1284	執権貞時
1284	弘安7	時宗没す		
1285	弘安8	<u>東慶寺</u> 創建		
1301	正安3	円覚寺梵鐘（物部国光）	1301	執権師時
(1311)	執権宗宣	1311 煙時 1315 基時 1315 高時		
1326	貞顕	1326 守時 1333 鎌倉幕府滅ぶ		
1354	文和3	★越谷市東方の板碑		
1394	応永元	上杉憲方没す		

第362回 史跡めぐり 建長寺で座禅 そして初冬の北鎌倉

平成18年12月11日(月) 集合 午前7時45分 越谷駅東口

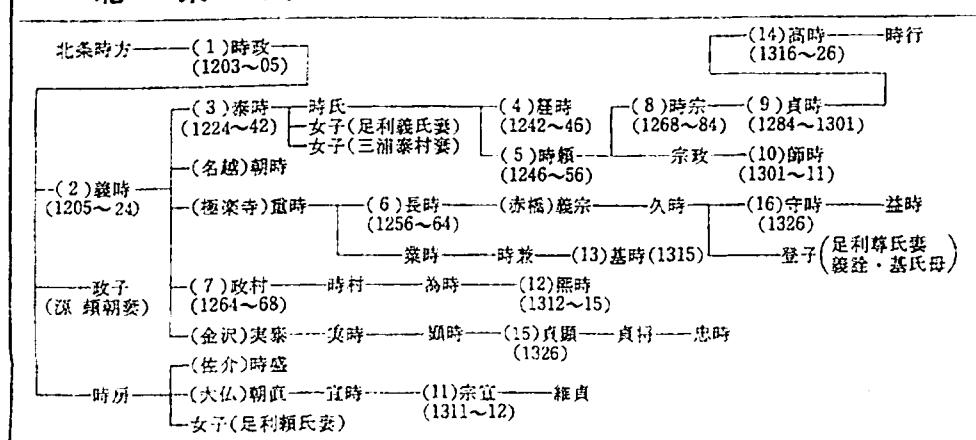
コース 越谷駅=大手町駅…東京駅=北鎌倉駅…円覚寺…明月院…建長寺<座禅体験と
禪寺の一汁一菜>…淨智寺…東慶寺…小町通り<自由時間>…鎌倉駅=東京駅…大手町
駅=越谷駅 <解散> 参加費 7,500円(交通費・研修費・拝観料など)

ご案内 会長・宮川進

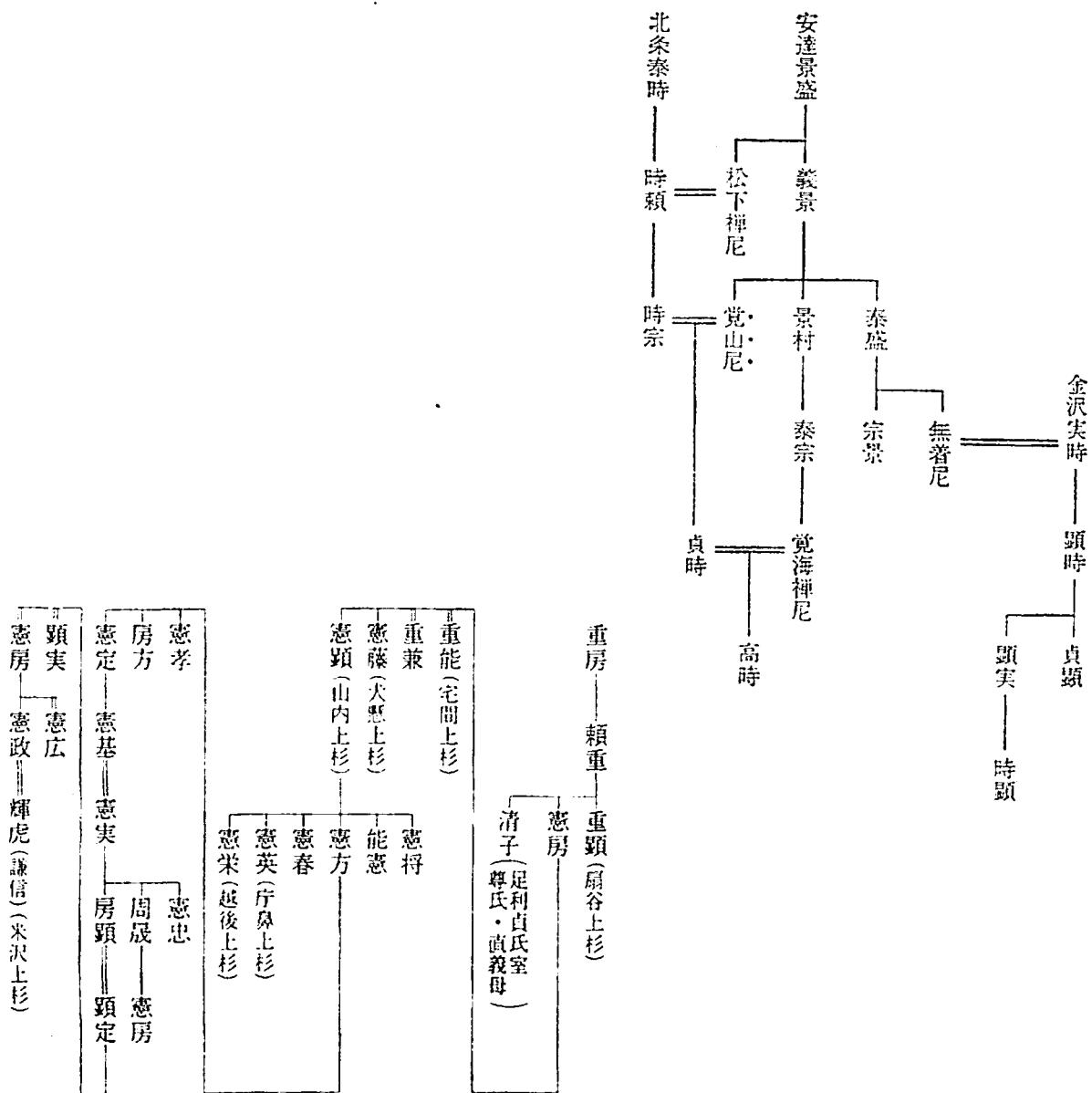


北条氏

数字は鎌倉幕府執権の順序及び在職年数



覚山尼関係系図



◎北条氏

○政子

源頼朝の妻。

栄西を迎え、寿福寺を建てる。

○時政

源頼朝の妻となつた政子の父。伊豆・狩野川流域の豪族。
初代執権。(1203~1205)

○義時

政子の弟。

②代執権。(1205~1224)

○時頼

義時の曾孫。

⑤代執権。(1246~1256)

父・時氏と母・安達景盛の娘(松下禅尼)との子。

三浦氏(泰村・光村)一族を滅ぼす。

蘭渓道隆を迎へ、建長寺を建てる。

明月院の地に最明寺を建てる。のち、息子時宗が禅興寺として再興。

墓はこの明月院の中にあり。謡曲「鉢の木」でも知られる。

○時宗

時頼の息子。

⑧代執権。(1268~1284)

18才で執権となり、文永11(1274)年と弘安4(1281)年の2度の元嬰來の難局をのりきつた。日蓮を処刑しようとした。

無学祖元を迎へ、円覚寺を建てる。

33才で没す。廟所は円覚寺内の仏日庵。

○覚山尼

時宗の妻。弘安7(1284)年、時宗の臨終のとき出家した。安達泰盛の妹。翌弘安8(1285)年には泰盛など安達家の滅亡にあう東慶寺の開山。駆込み寺法をその子・貞時に認めさせた。

○貞時

時宗の息子。

⑨代執権。(1284~1301)

東慶寺の駆込み寺法を認めた。円覚寺の鐘を寄進。

○宗政

時頼の息子(三男)。

夫人は宗政の死後、彼と息子・師時を開基として淨智寺を建てる。

○師時

宗政の子。

⑩代執権。(1301~1311)

北条氏は時宗の孫の高時の時に滅亡。執権は16代・守時まで。

開基北条時宗
圓山無學祖元

圓覺寺

山ノ内にある。瑞鹿山圓覺興聖禪寺。開基は北条時宗、開山は無學祖元である。臨濟宗圓覺寺派本山。

一

祖元は無準師範
範の法嗣

元兵出元に危
害を加えず

開山の無學祖元は字を子元という。無學はその号である。無準師範の法を嗣ぎ、又石溪心月・懶漢廣開・虛堂智愚を訪い、ついで諸寺に歷住した。徳祐元年(三五五)に蒙古軍が南下し、無學は兵禍を避けて浪州能仁寺にいた。翌年元兵が寺に侵入して寺衆みな逃げ隠れたとき、無學はとどまって堂中にいた。元兵が祖元に刀を突きつけてせまったとき、自若として「乾坤無地卓孤節 嘉得人空法亦空 珍重大元三尺劍 電光火裏斬春風」という偈を説いたので、元兵はこれに感じて危害を加えずに去ったという話はよく知られている。

その頃(弘安元年、三五八)日本では關渢道險が救して建長寺の住持が空席となつた。そこで時宗は弘、元年十二月關渢の弟子無及等註・宗英の二人を宋に派遣して、名僧を招聘せしめた(圓覺寺文書、北条時宗書状・史料編二ノ四)。當時幕府が迎えたいと思っていた人は天童山の釋惟一であつたという。この人は無準師範の法嗣であるが、すでに八〇歳に達していたので、代りに首座の無學祖元を派遣することになつた。

祖元は弘安三年(三五九)六月に太宰府に着き、八月に鎌倉に入った。時宗は弟子の札を具えて之を迎え、建長寺に入らしめた。(史料編二ノ五)祖元時に五四歳、時宗二十九歳であった。祖元はすでに在宋のときから、法友である古潤によつて日本のこと、特に時頼の臨終の時の事などを聞き及んでいたので、東渡を期していたという。

時宗、祖元に参す時宗さきに大休正念に参ること久しく、「即心即仏、非心非仏」の公案を得て之を工夫していたが、未だ之を窺くことができないでいた。祖元はそこでこれを放下せしめたが、その説く所は諄々として懇切をきわめている。(「仮光錄」弘安の役の前後における時宗の決断が、祖元の激励による所が大きいことはすでに多く指摘されている。

さて圓覺寺は弘安の役の翌年弘安五年(三六三)十二月八日に供養が行なわれた。

弘安五年十二月圓覺寺供養を行なう
圓覺寺開創にまつわる諸伝説

これよりさき、弘安元年(三五八)に時宗は道险を開山として一寺を建立しようとした。道险と共にその土地を物色したが、いまの圓覺寺の地で道险は一處を指してここがいいでしようといふのでここに廟を入れてその地を下して帰つた。これから起工して地を穿つた處、中から石碑がでてきた。みるとその中に圓覺經が納めてあつた。寺名はこれより起つたといふ。(「建長寺年代記」・「木刻高僧伝」・「鹿山略記」)又開堂の日、白い鹿の群が衆と共に説法を聴聞した。そこで山号を瑞鹿山としたといふ。(「元亨報書」)また「元亨報書」には祖元在宋中鵝岡八幡宮の神が祖元にしばしばあらわれて來朝をなつたとか、鳩がどうしたとかいう話を伝えてゐる。また総門前左右にある白鷺池は、八幡大神が白鷺と化し、道案内をしてこの池にとまつたからだといふ。これらはすべて大寺社の開創によつわる其通の奇縁の一であるが、圓覺寺も亦こうした奇縁をもつてのはじめを飾ることにおいて、例外ではなかつたわけである。

開山覚山尼は秋田城介安達義景の女、母は北条時房の女、時房は尼將軍政子の弟、いずれも鎌倉の名門である。建長四年（一二五二）七月四日、鎌倉長谷甘繩の安達邸で生まれた。『吾妻鏡』には、この日の條に、

天晴、午刻秋田城介義景妻、女子平産云々、号堀内殿者也。

とある。日本女性史上の代表的人物となる覚山尼こと堀内殿の誕生を祝うがごとき晴天であった。のちに夫となる時宗は、この前年五月十五日に同じこの安達の邸で生まれたのである。

堀内殿には兄泰盛以下八男三女の兄弟姉妹があるが、この翌年父が逝き、兄泰盛が城介となり父代りとなる。『徒然草』にも出てくる障子の切り貼りをして、世を治むる道、僕約を本とすと、わが子時頼に教えた松下禪尼は安達義景の妹であるから、堀内殿には叔母であり、後に時宗夫人となつては外祖母になる人であるが、同じ甘繩の邸内に住んでいたから、少女時代に訓育感化をうけたことであろう。

兼好は松下禪尼を「女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を子にて持たれける、誠に、ただ人にはあらざりけるとぞ」と非凡の人物として書き残したが、同じ『徒然草』のつづきの段に、兄泰盛の逸話をのべて、乗馬の双なき名人で道を知る人物だとほめている。

『明恵伝記』によれば、承久の変の時、明恵の居つた梅尾高山寺の山中に官軍の將士が多く逃げ入つたというので、城介義景が山中にはいって探索し、明恵をとらえて六波羅の北条泰時の前につれて來た。この時、明恵は、

「この山は殺生禁断の地であり、鳥でも獸でもここへかくれて命を続ける。さればこの山へ逃げこんだ兵士を追い出すわけにはいかぬ、わが身がどうなろうとも」

と押返したので、泰時感涙を催おし、これより深く明恵に帰依したという。これも有名な話であるが、この時、義景は十一、二歳の少年であるから、これは父の景盛の誤りであろう。高山寺

にしろ、高野山にしろ、寺は一種の治外法権的特権があり、軍兵が走入したこともあるのである。この明恵の話を堀内殿は兄から聞いたことであろう。これは後に、駿入寺を作る彼女の生涯上に大きな影響をおよぼすと考えてよい。

建長五年六月三日、堀内殿が満一歳にもならぬ前に父義景は四十四歳で死んだ。この年十一月に建長寺が落慶した。この寺は時頼の本願で、建長三年十一月起工、開山は宋から渡来の蘭溪道隆である。

時頼はこの三年後に執権を長時にゆずり、最明寺に出家した。時に三十歳、出家しても鎌倉の最高の実力者として政治はみていた。この時、相模太郎正寿丸六歳、翌年元服して時宗と称した。弘長元年（一二六二）の四月二十三日に、時宗十一歳、堀内殿十歳で結婚、安達邸から時宗邸に移った。早婚であり、近親結婚であるが、当時は珍らしくない。堀内殿から見れば時頼は従兄弟であるが、ここで舅と嫁の間柄となる。北条家の若君、後の執権となるべき時宗の妻として、その家柄、その人物最も適格の者として松下禅尼の推挙したものであろう。時宗が極楽寺の馬場で小笠懸の妙技を見せ、將軍宗尊親王の御感に預かり、時頼は、わが家をうけつぐべき器であると大いに喜んだ話は、この結婚の翌々日のことである。この時、時宗は諸人の感声動搖を尻目に、そのまま馬を飛ばして邸に帰つたとある。十歳の新夫人堀内殿は、どんな表情でこれを迎えたことか。まぶたに浮かぶようなほほえましい風景である。

高柳光寿博士は、『吾妻鏡』では時頼の家を御所といい、時宗を若君と記しているが、これは將軍家の待遇であるから、時頼は実質的には將軍であつたといえるし、北条氏の勢力は時頼に至つて極盛に達したというべしと論ぜられる（鎌倉市史総説）。

この時宗の新婚時代は北条家の最高、最良、正に最明のころであつたといえよう。これより三年後の弘長三年十一月二十二日に時頼は、最明寺の北亭で、法体にて、袈裟をかけ、繩床に上つて坐禅をして、遺偈を唱えて入定した。この即身成仮の瑞相をおがもうと道俗貴賤群をなしたと

『吾妻鏡』は伝え、禪の本でも、「末後一機超仏越祖」と賞讃し、遠く海を越えて宋國にまで伝唱され、円覚寺の開山無学祖元禪師が日本へ渡来される動機ともなつたのである。

時頬の死は、当時の鎌倉人には大きなショックであり、平生恩顧の武士は、この時多く出家した。その中の城時盛、関戸丹後守頬景らは時宗夫人の兄である。若い時宗夫妻にも深い哀傷であつたろうが、同時にまた、その末後の牢閑を透り、寂然不動の臨終の有様は、両人の禪への信仰を深め、大休正念や無学祖元らの名僧が来朝し、円覚寺をはじめ多くの禪寺が造営され禪宗興隆の根源ともなつた。

文永元年（一二六四）八月に、連署政村が執権となり、時宗が連署となり、十一月時宗の兄時輔は六波羅探題となり、京都に赴任した。

文永三年六月、時宗は執権政村および一族の評定衆金沢実時、同じく評定衆で夫人の兄泰盛の三人だけを山ノ内の別邸に招いて密談し、その後二十五歳の將軍宗尊親王を廃し、三歳の惟康王を立てる。この別邸は山内殿といつて最明寺の別業をさす。ここ東側の新亭は山内泉邸とも東亭ともいうが、明月谷の川に臨んだ亭で、宗尊親王も納涼二泊されたこともある。

文永五年三月、時宗が執権となり、政村が連署となつた。このとき時宗はわずかに十八歳であつたが、彼は北条家の嫡男得宗である。この年一月、高麗の使者が来て蒙古・高麗の国書を差出した。そこで得宗の時宗を主脳とし、一致協力して蒙古に対決しようとの国防上、この役職の交替となつたのであらうが、これより文永・弘安の蒙古襲来は時宗一生の大事件となる。

文永十一年（一二七四）十月、蒙古兵三万、船艦九百艘、対馬・壱岐を侵し、筑前に上陸。二十日の夜暴風が起り、蒙古の船艦海没二百余、溺死一万三千五百人、敵は大敗して逃げ去つた。弘安四年（一二八二）五月、蒙古軍四万人、船艦九百艘で再び来襲、六月さらに十万の大軍、三千五百艘の船艦來襲、筑前、肥前の海は敵船で充満したが、わが軍よく防戦し、閏七月一日の大

暴風により敵の兵船ほとんど海没、溺死無数、わが軍大勝という次第、ここで元寇のことを説明する要もないから略すが、時宗はこの来寇に際して、その願文に、「一箭を施さずして四海安和」と書いたように、和平解決せんとしたが、ついに敵の来襲となり、干戈を交えざるをえぬこととなつた。幸いにわが将兵の勇戦と颶風のおかげで、わが國土は元軍の馬蹄に蹂躪されず、玄海灘月清く静かな日本の朝を迎えることができたが、執權就任以来十五年の長きにわたって、一生この国難に対決せねばならなかつた時宗の生涯は、思いやるだに胸痛むものがある。

これより先、日蓮は『立正安國論』を著わして時頼にささげたが、彼は黙殺した。文永五年、蒙古の来状を聞いて日蓮は時宗に書状を送り、建長寺の蘭溪、極楽寺の忍性にも書状を与えて挑戦したが、誰も返答しない。文永八年六月、幕府は忍性に雨を祈らせた。これを日蓮は猛烈にやじつた。ついに九月十二日、竜ノ口で首の座に引据えられた。この時、刀が折れたとか、奇蹟があつたとかで、日蓮宗では「竜ノ口の御法難」と称するほど有名な事件であるが、事実は時宗夫人の懷妊のゆえに、俄かに死罪を赦されて佐渡に流罪となつたのである。

「なにとなくとも禰を切らるべきりけるが、守殿（相模守時宗）の御だい所の御懷妊なればしばらく切られず」（『種々御振舞御書』）

と、日蓮自身がのべているとおり確かなことで、これについては辻善之助博士も『日本仏教史』に詳論され、すでに学界でも定説となつてゐる。ともかく時宗夫人のお蔭で、日蓮はあやうき命を助けられたことになる。

この年十二月二日に、貞時が生まれた。夫人二十歳の時である。

翌文永九年に「二月騒動」があつて、側室の子ながら時宗の兄時輔が六波羅で殺された。時輔時に二十五歳。貞時の生まれたことは、時宗夫妻には慶事であったが、時輔一味には凶事となつた。この事件は若い時宗夫妻には一大試煉であつたろう。が、それにもましての苦難は蒙古襲来であつた。

これより前、弘安元年（一二七八）建長寺の蘭溪がなくなつたので、時宗は徳詮・宗英の二僧を中國に派遣して名僧を招來する。その時の招請状は円覺寺に現存する。これを読んで来朝されたのが無学祖元、この人はかつて元の兵禍を避けて雁山の能仁寺に居た時、元兵が白刃を揮つてせまつたが、泰然として、臨劍頌を吟じ、敵兵退散したという話のある有名な高僧である。

弘安二年六月、太宰府に着き、八月鎌倉に入り、時宗は弟子の礼をとり、建長寺の住持に任じ、熱心に参禪した。元軍襲来の時、「莫妄想」の一語で、時宗の決断力をつけた話も有名である。時宗は勇猛心を起こし、金剛經・円覺經を血書し日本国土の安泰を祈願し、その時、無学は、一字一画ことごとく神兵となつて勝利を得ると供養の法語をのべている。

弘安の役の翌弘安五年（一二八二）十二月、時宗は円覺寺を建立し、無学を開山とし落慶法要を行なつた。時宗はさらに地蔵一千体を造つて戦歿者の冥福を祈つたが、その時の無学の語、「前歳及び往古、此軍及び他軍、戦死と溺水と万衆無帰の魂、唯願くは速かに救拔し、皆まさに苦海を超えんことを。法界了として差なく、冤親悉く平等」（『仏光錄』原漢文）

敵味方といわず、此軍及び他軍といいう表現といい、これはみなみならぬ尊い文字であり、尊い思想である。時宗は翌年には金光明經を書写して戦歿者の供養をしたりしたが、弘安七年三月末に病となり、執權邸から山内の別邸に移り、夫人をはじめ一門、万民回春を祈つたが、二十年來の困難の重担、一生の心血を護國に注ぎ尽くして、四月四日、三十四歳の若さで死んだ。この時、無学に請うて落髮付衣、法光寺殿道果と安名され、この時夫人も共に落髮付衣、覺山志道と安名された。

時宗は「山内殿」といわれ、山内に住んでいたと（市史總説、一三三頁）いう。また「梅峯」という号で詩も作つたらしい。父時頼にならつて最明寺の別邸で坐禪し、遺偈を書いて長逝したのである。

この時、出家するもの夫人をはじめ一族従者三十四人、夫人の兄泰盛もこの時出家し、覚真なる法名となつてゐる。全国の殺生を禁ぜられる等、朝野をあげての悲歎であつた。円覚寺の奥に葬られ、その上に祠堂が建立された。仏日庵の開基廟がこれである。

時宗を「山内殿」とい、また貞時夫人は「山内禪尼」という（成松保について「貫達人」）。こういうことより推察すると、時宗夫人の「堀内殿」というのは、山内殿の中に堀をめぐらした邸宅があつてそれをいったのか。葉山町に堀内という所があるが、それと関係あるか、未詳。

時宗夫人出家して覺山志道尼となり、志道尼は時宗と死別の翌弘安八年（一二八五）に、東慶寺を開創した。このころまでに北鎌倉には建長、円覚、淨智、禪興、長勝等の禅寺が続々建立される。時宗夫妻が住みなれた山内別邸、修禪の道場であり、臨終の場所であつた最明寺より指呼の所、歩いて僅か数分のこの松ヶ岡、前方明月山頂より月の上るを仰ぐ松ヶ岡、覺山禪尼がこの地を相して、その後半生を托すべき退蔵の庵を結ぶには実に恰好の所であつた。この松ヶ岡の上からは、なつかしの山内別邸も泉亭も田の下に臨まれるのである。

○舍利殿

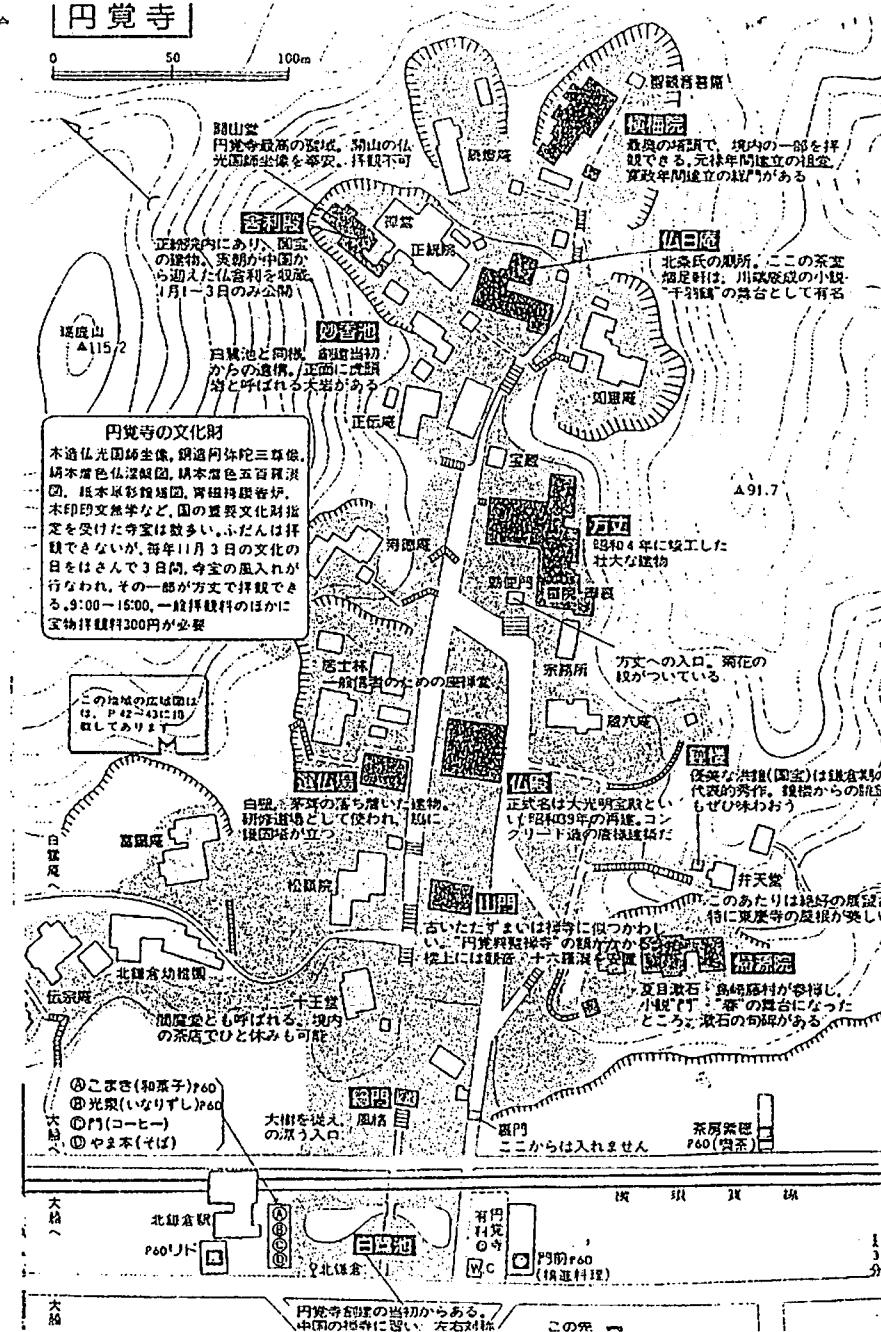
室町時代に太平寺という尼寺から移されてきた。

三代将軍・源実朝が宋から分けてもらつたという仏舍利がおさめられているという。

日本最古の唐様建築で国宝である。

○仏日庵

北条時宗は文永一一（一一七四）年の元軍来襲のとき、二三三才。弘安四（一二八一）年の再度の来襲時には三〇才。精神的負担が身体をむしばんだのか、三三才で没。その廟所が仏日庵である。





無学祖元像——中国の名卓僧を招請したいと考へて、頃法性院に立つてゐた北条時宗は、無学の高足をと考へ、無学祖元を招請した。未だした無学は北条一門に迫切な教化を加え、彼らの精神的支柱となつた。

無学祖元

無学祖元が宋朝したのは弘安二年（一一七九）である。蘭溪がさると、中國の名勝宿を招聘したいと考えていた北条時宗は、蘭溪の遺弟無及（むじ）と僚友宗英（むねおとし）を中國に派遣した。

『歐陽文忠公集』によれば、とき招請使の途中にあつたのは無通師範の弟子環溪（くわいせき）である。しかしすでに八〇歳に達した環溪は老齢のゆえをもつて固辞し、法弟で環溪弟子の首座をつとめる無学を推薦したのである。無学は四四歳にして台州真如寺の住持

を七年間つとめおわって、このとき五十四歳になつてゐた。彼は環溪の大衆接化を賣けるために首座の位にいたけれども、日本僧と深い交わりを結んではなかつたらしく、しかし時頼が臨終に際して法衣を着、歎息として坐禅の姿のまま入寂した話や、日本が仏法の盛大であることなどは聞き知つていたらしく、環溪の指名をうけるとこれに応じた。無学は永年無事のもとに研鑽をつみ、無事はその悟境を了としていたらしいが、しまづ歩のところで印可をうけたことがさぬうちに無事の死にいたつてゐた。そこで宋朝が決定すると環溪は、まことに無事に代わって法衣を付与し、禪師からの印可の嚴然たることを証明した。

こうして宋朝はただちに鎌倉に下向し、八月三日延長寺第五世住持に就任した。

時宗は無学に日夜參禮し、ときには無及（むじ）と號を用いて無学の指示を仰いだ。問答は通訳を介して行われたらしく、時宗にかねて通訳が無学から接化の打棒を加えられている。時頼に面

風流格を加えた元龜に比べると興味深い。

弘治四年、蒙古が再び攻めてきた。

時宗は國家の安泰と万民の保全を祈つて金剛經・円覚經などを唱誦し、無学に首座説法を請うた。

蒙古に国土を奪われた宋のひと無学は、時宗の危惧に深い同情を示し、説法を行つてゐる。

蒙古の来襲がさしたる被害をもたらすにおわると、世上には哀痛の気がみなぎつた。

そこで、北条氏異代一寺ずつ開立する慣例に従い、蒙古合戦における我の敗戦者の菩提を弔うため、新たに佛院を建立しようという氣運がわきおこつてきた。それが圓覚寺の開創となつた。圓覺院・華嚴院を重んじた無学の意に従い、丈六金色の毘盧舍那仏坐像を安置し、その他の諸像や伽藍の配置にも華嚴世界を現前する工夫がなされ、枝々の地形をうまく利用して天童寺に典型的な階段状の境内構成を用いた。

山ノ内、淨智寺の向いの谷にあり、この谷を明月谷という。開基は上杉憲方、開山は密室守嚴。もと禪興寺の塔頭である。明月院ははじめ禪興寺の塔頭として成立したものであるから、禪興寺はいま廢寺となっているが、叙述の都合上禪興寺を先にのべる。さらに禪興寺は時頼の建立した最明寺が廢寺となつてゐたのを時宗が再興したものであるので、最明寺まで溯つて書き起さなければならぬ。

最明寺

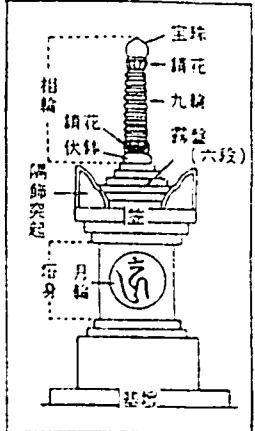
北条時頼は山ノ内に邸宅をもつていた（『吾妻鏡』延長六年六月条）。この場所はいま最明寺址と伝える明月谷の奥であるといふ。最明寺は時頼によつてその亭の傍にたてられたものであるが、康元元年七月にはじめて將軍宗尊親王をむかえて礼拝のことがあり、十一月二十三日に時頼はここで落防（年三〇歳）、日來の素懶をとげた。戒師は關溪道隆であつた。（『吾妻鏡』）

明月院

開基は上杉憲方、開山は密室守嚴である。永徳三年（一三八三）足利氏満から源方にあてた書状その他の『史料編』三ノ三八三・三八四・三八五によつて山内庄尊頃及び常陸國富太庄内吉来その他二郷が憲方から明月院によせられていることがわかる。又憲方、憲基の時に新たに上野・武藏の中に地を寄せられてゐる（上杉憲定寄進狀『史料編』三ノ三八七、同意基寄進狀、三ノ三八八）。上記の古図には仏殿らしい建物の両翼に廊下によつて仏殿と結ばれた各一箇づつの建物があり相称をなしている。そのほかに三つの附属建造物と前面に門と石堀がみえる。

山内上杉氏は戦国時代にいたるまで盛んであつたし、明月院の所領は関東にかぎられているから、かなり後までその年貢が絶えることはなかつたと思われる。一方憲方の菩提を弔うために大石大炊助が建てた武藏国足立郡の妙楽寺もはやく応永十二年（一四〇五）に明月院の末寺となつた。（『重鏡記文』史料編三ノ三八七）

- 第五代執權の北条時頼の墓
- 瓶（つるべ）の井 鎌倉十井のひとつ
- 本尊は如意輪觀世音菩薩。那須与一の守り本尊であつたと伝えられている。
- 木造上杉重房坐像は重要文化財
- やぐらは鎌倉市内に現存のもののうち最大級。中央は上杉憲方の宝筐印塔もとは平治の乱で戦死した北鎌倉の豪族・首藤俊通の菩提供養のため、首藤經俊がつくつた
- なんといつても「あじさい寺」

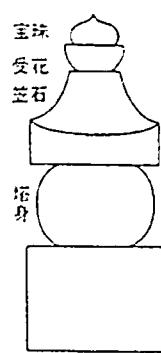


宝篋印塔の各部名称

過去現在未来にわたる諸仏の全身舍利を奉藏するためには「宝篋印陀羅尼經」を納めた供養塔。鎌倉中期から造立。

塔身に輪郭をつけ、基礎の下にはっきりした「反花座」を加えるのが関東型の特徴。また、古いものほど、隅鉢突起が直立。伏鉢がちいさい。

五輪塔



五輪塔各部名称と意味

梵字	五大	形式	子房	五氣
三	空輪	团	虚空	土用
火	風輪	半月	因蘆	冬
水	火輪	三角	壁壇	夏
地	水輪	円	官銳	秋
	地輪	方	不生	春

地・水・火・風・空。の五大を宇宙の生成要素と説く仏教思想に基づいて平安時代に創始。平安時代は傾斜のない火輪。樽型に近い水輪。横長の地輪。

鎌倉時代は四隅を直線で切る火輪。球型の水輪。方に近い地輪。室町時代は反り四隅を斜線で切る火輪。

縦長の地輪。江戸時代は突き出た空輪。反り極端な火輪。縦長の地輪。

銅鑄製。非常に大型の梵鐘で、田観寺鐘と共に関東梵鐘の代表作といわれるものである。

高さに比して口径のやや大きい、裾広がりの堂々たる形姿をもつ鐘である。竜頭の形状は鷲の先端を鋭く立てる勇猛な龍首に宝珠が置かれている。笠形は低く、上面を広く水平にして周囲に割りをつけている。乳の間の丈が短く、池の間の丈が長く、乳は円柱状の突起で、五段七列に配している。上帯は四方に飛雲文を、下帯には四方に葉状唐草文を線条に鋳出している。駒の爪は三条の紐からなる。撞座は八葉複弁蓮華文で、子房に十七個の蓮子をおき、周囲に芯を表わしている。撞座の位置は下から三分の一程度のところで、やや高めであるが、竜頭と撞座の関係は奈良時代の鐘と異なり、竜頭の鼻先に撞座がつく鎌倉時代以後、広く盛行する形式のもので、時代の特色をよく示している。

池の間に二区には鋳出の鐘銘があり、これによつて、大檀那は北条時頼、撰文と書は蘭溪道隆、鋳工は鎌倉時代鋳物師筆頭の物部一族の初代、物部重光で、建長七年（一二五五）に造られたことが知られる。

鎌倉時代の代表的な鐘であるが、隨所に復古的な意匠がみられる。銘の書体が鋳出銘であることは注目されよう。（中野政樹）

建長寺

巨福山建長興國禪寺。開山は蘭溪道隆、開基は北条時頼である。小袋坂の北側に勝上院に向うで北東に切れ込む谷にあって、南西に面している。臨濟宗建長寺派の本山である。

一

建長寺の地

巨福山の号は巨福呂(小袋)の地名にとったもの、建長寺のある谷はその開創以前地獄谷といつて犯罪昔处刑場たり

し處刑場たり
伽羅陀山心平寺

地獄谷廻残

ここが處刑場であった東一字の寺院があり、伽羅陀山心平寺と号した。後嵯峨となつて地蔵堂だけが残つていたのを、建長元年に北条時頼がその地をひらいて建長寺を創建するために小袋坂に移建したといふ。「鎌倉志」「風土記稿」は「鎌倉大日記」に「建長元年小袋坂地蔵堂建立」とあるのがこれであると述べている。建長寺境内古絵図(延宝六年徳川光圀寄進と伝える。後述)に圓覺院よりも奥の西御門界に近く「地獄谷廻残」と記した所がある。又上の地蔵堂は「東海法窟」の額を掲げる裏門(南外門)の前の道を巨福坂にかかる手前に之が廻かれている。この堂は巨福島坂新道開通前まであったというが、今はなく、その本尊という地蔵菩薩坐像が建長寺の仏殿内に安置してある。また別に俗傳には、時頼の時代に森田左衛門という者が罪によつてここで斬られようとした時、大刀が折れて切ることができなかつた。彼の腹の中に藏する一寸八分の地蔵のためであつたので、これを斧として刃を辟された。この小僧は心平寺の地蔵の頂中に納めた。後、当寺創建の時仏殿本尊の脇内に移したという。現在は別に安置されている。この地蔵を俗に賀田地蔵といふ。

上の古絵図をみると、勝上院の地蔵堂、わめき十王跡、原田地蔵院等地蔵乃至地獄にちなむものが多い。また「鎌倉志」「風土記稿」の伝える七月十五日の施餓鬼の行事は、それによつてる伝説は信ずるに足らぬが、施餓鬼自体は「鎌倉年中行事」(享徳三年)まで廻ることができる事がわかる。参考までに桃原施餓鬼の伝説を記しておく。昔開山大覚禪師在世のとき、武者が一駆來て、山門の下で行われる施餓鬼がもう終つてゐるのをみて、残念そうに引帰していった。時に大覺禪師がその有様を見て呼びかえさせてもう一度施餓鬼金を設けて聽聞させたところ、その武者は、自分は桃原茶時の大姫であると告げて感謝して去つていた。稻米当寺では毎年七月施餓鬼会終了後桃原施餓鬼といふ行事が行われるという。(『鎌倉志』)

本尊

本尊は伝応行作丈六の地蔵菩薩像。丈高い宋風の蓮華座の上に結跏趺坐し頭を左右に垂らした鎌倉地方に多い宋朝風彫刻の雅作。仏殿が小さいので天井につかえるような巨像である。堂内には他に尺余の千体地蔵尊及びもと心平寺にあったといふ地蔵尊を安置する。

開祖道隆

蘭溪道隆は宋國西蜀の人。成都の大慈寺に於て得度し、諸所を巡回して無准師範・撲絶道冲・北闇居簡等の諸老についたが、得處なく、最後に無明慧性について悟を開いた。道隆は在宋の頃日本僧泉涌寺來迎院院主月翁智鏡に遭つてこの人から日本の事情を聞き、夙くより渡日の志があつたという。寛元四年(三九二)來朝、夾迎院に寓した。智鏡は厚く之を遇し、鎌倉に赴くことを勧めた。道隆は鎌倉に来て寿福寺に入つたが、時頼はここから常楽寺に移した。常楽寺と道隆の関係については常楽寺の項に述べる

が、建長元年(三九三)建長寺造立事始(『聖一年稿』等による。『吾妻鏡』は三年とす)、同五年十一月に竣工して時頼は道隆を開山にした。山号及び本尊については前述したが、寺名は年号により、建立の趣旨は上皇帝の万歳を祈り、將軍及び重臣の千秋、天下の泰平を願い、下は三代の將軍、二位家(政子)及び一門の冥福を弔うというものである。(『吾妻鏡』)

○山門

狸の山門といわれる。山門再建の寄付を集めため全国に派遣された靈水の中に、建長寺の裏山に住む狸がいた。狸は多くの寄付を得たものの、帰り道で犬に噛み殺されてしまつた。僧たちはこの狸の志に報いるために、その金を山門再建の資金に加えたといふ。

蘭溪道隆

禅僧といえば容貌魁偉な巨漢、達磨大師像を思い浮かべるが、この蘭溪道隆（一一一三—一七八）は、細面で撫肩のじつに優男である。この男が三十三歳で北条時頼の招きで宋の西蜀から来日し、鎌倉に厳格な宋朝禪を確立した。そして、建長寺を創建し鎌倉禪の中心となつたとは信じられるほどである。

すでに榮西や円爾によつて、禪密兼修のいわば和風の加持祈福禪は京を中心に広まりはじめていたが、中国の官制禪林の軍隊のような規律に基づく、純粹禪を確立したのは道隆である。鋼のように強く鞭のよう銳い禪風がこの頂相図から伝わつてくる。

禪では不立文字、以心伝心を本とするので、教えは師資相承マンツーマンとし、師の像を頂相と呼び、伝法印可の印として弟子に与える。弟子は忌日に初祖いらいの像を法堂にかけ供養した。この図でも曲象に坐り、右手に警策を持った人物を通して、崇高な礼拝の対象となる禪の境地がみえてくる。人間とは人間以上の世界でしか真に出逢えないものであることが、しみじみ感じられる。（国宝、鎌倉時代、絹本着色、一〇五×四六センチ、鎌倉・建長寺蔵）



○第二世住持は兀庵普寧。

*「ゴテル」「ゴタゴタする」の語源か？

*地蔵菩薩と僧とどちらがうえか？

○わが国で初めて「禅寺」と称した。山号は巨福呂坂にちなみ、寺号は元号に由来する。扁額「巨福山」は第十世住持の一山一寧の筆。巨の字に筆勢による一点を加えて「巨」とし百貫の価をそえたので、世に百貫点という

淨智寺

開山普寧、請
待開山正念、請
基開山宏海、請
時と伝う
兀庵普寧

山の内にある。山号は金峰山といい、臨濟宗円覚寺派に属する。寺伝によれば開山は兀庵普寧、請待開基開山正念、準開山は南州宏海、開基は北条時頼の子宗政、及びその子師時と伝える。師時は貞時、元庵普寧について第十代執権となつた人である。

兀庵普寧は宋國西蜀の人、建康の蔣山で撫絶道冲に師事し、四明の青王山では無地師範の下にあって得悟した。宋が蒙古に攻められ寺院も多く侵されたので、文應元年（一二九）渡海して米朝した。東福寺の圓爾が京に迎えたが、時頼の招聘により鎌倉に来て延長寺にいた。（延長寺の項参照）

普寧が日本を去ったのは文永二年（一二五）であるからこの間僅か五年しかいなかつたわけである。時頼は弘長三年（一二五）に死んでいるが、その後普寧はしばしば賀茂の正伝寺の東福院安に書を寄せて辭意を漏している。慈安は、時頼の死後鎌倉にまことに仏法を信する者なく、時宗はなお幼少であつて爾余の大名も普寧に心を寄せていないことを察知していたが果して普寧は時宗に強いて別れをつけ、さらに寺に帰つて大衆に別れを告げた。外護者達の寄附した金帛に封印し、語錄に「此間吾が語錄をみるべき者なし」と流きすてて述べるようにして鎌倉を去り京都に帰つてしまつた。その後間もなく普寧は日本を去るのであるが、この普寧の帰國は大覚派との糾撓によるもので、間際の疑をうけたというのもそれが原因で中傷されたものであらうといふ。

○甘露の井 鎌倉十井のひとつ

○鎌倉七福神の布袋尊

○木造三世仏坐像

阿弥陀、釈迦、弥勒の各如来は過去、現在、未来を表している

○地藏菩薩坐像は重要文化財

弘安四年（一二八一）八月七日に執権時宗の弟北条宗政が二十九歳で没してこの淨智寺谷の奥で荼毘して埋葬し淨智寺が創建された。この時時宗三十一歳。

師時はのちに執権となり、応長元年（一二三一）の檀那は誰か。從来淨智寺では、故開山は普寧、請待開山は正念、準開山は宏海とし、開基は宗政の子の師時とする。

淨智という寺名が最初に出るのは大休正念の壽福寺語録の中の弘安四年の年末の部の「為宏海首座檀那の諸を受けて淨智に住する上堂」である。

この宏海首座とは南洲宏海、早く出家し來朝した兀庵普寧に参じて大いに器許され、のち入宋し、淨慈寺に掛搭し、更に諸寺を遊方し、帰朝の後、大休正念に隨侍し鐘愛された。弘安四年年末に檀那の諸を受けて淨智寺に住した。

南洲宏海はこの時四十歳、己の師兀庵普寧を尊崇して開山と仰ぎ自らは準開山となつた。

東慶寺

松岡山東慶院持・神寺。山ノ内の街道をへだてて円覚寺と向いあう丘の中腹にある。東側の丘をへだてて淨智寺と境を接して隣り合っている。寺号のうち、總持は達摩大師の弟子總持尼に因んで、神の尼寺の意を含めた名であるといふ。臨濟宗圓覺寺派に属する。

当寺については東慶寺住職市史編纂委員井上禪定師の『駁入寺』(昭和三十年小山書店発行)の著があつて精しいので、以下の記述もこれに従る所が大きい。

開基北条貞時

開山覚山尼と

伝う

覚山尼は安達

氏の出、夫時

宗の歿終の際

落髮す

覚山尼は弘安八年(三六〇)雷月騒動でほろびた安達泰盛の妹である。覚山尼は弘安七年夫時宗の歿終の際、時宗が祖元を尊師として落髮したとき共に落髮付衣、覚山志道大姉と安名した。翌年には泰盛・宗景・時長・宗頭等実家安達家の滅亡に遭つてゐる。『仏光錄』によると時宗の三年忌に自ら華嚴經を守して供養している。

二

二十世天秀法泰尼は豊臣秀頼の女である。元和元年大坂落城によつて秀頼は死に、七歳の幼女は豊臣秀頼の息女として天秀法泰尼と名づけられ、天樹院様(千姫)御義女に被爲成、元和元年儀現様依

上意当山江入薙染、十九世瓊山和尚御附弟に被爲成」とある。法泰尼は正保元年(寛永三十一年、一六四四)に示寂したが、その前から隠居していたので天秀法泰尼は寛永年間から二十世として活躍する。

天秀尼入寺に際し家康に對し寺法の維持を頼とせしもの説を補えられた。『山籍書』や『日記』によると法泰尼入寺に際し家康から希望を問われたのに對し、開山よりの寺法断絶なく承く相立てば、これにすぎた額はないと答え、これがゆるされて、江戸時代を通じて寺法が維持されたのだといふ。正保二年示寂というから、元和元年に八歳であった法泰尼に、こんな稚拙な説はできそうもないし、翌年には家康は死んでいるので、この話も事実かどうか疑わざるを得ない。禪定師は養母天寿(養・樹尚方用う)院千姫等のとりなしがあつたらうといわれている。(『駁入寺』)

けれども次の一件は寛永間に明障に当寺駁入寺法が存在していたことを物語つて余りがある。すなわち会津城主加藤明成の事件である。加藤明成は賤居七本槍の一人孫六嘉明の子、寛永八年会津若松

十万石を維いだが、甚だ不肖であった。老臣堀主水の忠諫もきかず主從不和となり、遂に主水は出府して主君を訴えたので、明成は立腹し家光に乞うて、高野山に入った主水を賜つてこれを殺し、ついで東慶寺に入つた主水の妻子を捕えて殺そうとした。住持法泰尼はこれを養母大樹院に訴え、寛永二十年幕府が明成の領地を没収した事件である。この事件における法泰尼の態度は誠に立派であるが、法泰尼は黄梅院の古軌周僧に參じたばかりでなく、沢庵に參拝しようとしたことがある(沢庵書状、史料編三〇三三八)位であるから、非凡な女性であったことは疑ひ難い。

○秀頼の遺児国松(八才)は京都六条河原で斬殺されたが、女の子は七才でこの寺へいれられた。修行をおえた天秀尼がいよいよ住持となるとき、家康に「願いの筋があれば何でも申せ」といわれ、「開山以来の女人救済・駆込みの寺法を永くお許しのほどを」と願い、許された。この「権現様のお声がかり」が枷となつて、「駆込みの寺法」は徳川期を通じて廃止されずにするんだ。

○覚山尼

北条時宗夫人。一〇才のとき、一一才の時宗に嫁いだ。

いたん嫁入りしたあとは、いかなる理由があろうと離縁することができず、不幸な生涯をすごす女性の多いことに心をいためていた。こうした女性が助けを求めてきたとき、寺に三年間住みこませ仏事を修行させた。しかるのち離婚を認めるというルールを時の執権・北条貞時が認めた。

○宝蔵

聖観音、初音蒔繪火取母、キリシタン聖餅箱（いずれも重要文化財）などが展示。聖観音はもと太平寺の本尊で、土紋装飾をほどこした宋風の影響のつよい鎌倉後期の作品。聖餅箱のIHSはイエスス会の章。

○墓所

西田幾多郎、和辻哲郎、高見順、安部能成、田村俊子などが眠る。

○鈴木大拙

この寺は鈴木大拙氏とも関係が深いことで知られている。

中興・釈宗演禪師の弟子が大拙氏。

姫入女専用宿

姫入女及びその関係者は寺役所で取扱をうけ、その間宿屋に泊る。はじめは専用の宿がなく文化頃「せんべい屋長右衛門」方が代用されているが、のち次第に専用化し、柏屋・仙台屋・松本屋が御用宿となつた。御用宿は姫入女に宿を貸したほか、調停を行つてゐるし、手続や書式を教え、また時には代書をしている。

飛脚門番

このほか飛脚・門番等があるが、信州・常州へ使する飛脚は大変であつたらうし、又門番も、表門は駿府の城門を移し、明六つより暮六つ迄が門限で、男子禁制、姫入女は当寺の表門までたどりつき、あと一步の處で追手に捕らうとするときは、櫛・笄或は下駄など身についたものを門内に投込めば寺に入つたものと見做され、追手を逃れ得たと、俗にいい伝えられるから、門番の役も他と異り一役であつたろうと、源定師は述べておられる。

祠堂金貸付

東慶寺には、天保五年に出願して許可となつた祠堂金貸付のことがある。これは、江戸と鎌倉二ヶ所に貸附所を設けて、その利潤を寺法執行の備金にするものである。当寺所蔵の文書によると、慶応二年の貸附金現在高は一七九六両であつて、相当な金額であつたことがわかる。明治維新と共にこれは廃止となつた。

○後北条氏が鎌倉を支配した16世紀はじめ頃は建長・円覚・東慶を鎌倉三ヶ寺とよんでいる。

「まあ、いいじゃないか。ともかくにも、つかまりもせず念願の東慶寺へ入ったんだ。御奉書はもう出たんだろう」

麿は八兵衛に訊いた。

御奉書とは東慶寺から、女の親元及び夫、双方に、女を寺であずかたことをしらせる書状だった。

昔は夫にだけこれを送つて、

『その方の妻にまぎれないなら、離婚し、以来どこへ再婚してもかまわぬという離縁状一札出してつかわせ』

とかなり強圧的に離婚させることを目的とした奉書だつたらしい。更にこれが元禄以前ともなると、東慶寺に入つただけで即離縁となつた。それだけ寺の権威が強かつたわけだ。

それが寛保二年（一七四二）の公事方御定書^{こうせいほうごじゆ}の制定以来、内容に微妙な変化が現れた。これは強圧的に離婚させるという色合いを減らして、寺であずかつていうといふ通達の方に重点が置かれ、夫に離縁状を出してはどうかとすすめる、或は説得する姿勢を示すことにどまつてゐる。現代の家庭裁判所の役割に似ているといつていい。つまりは一種の調停機関である。

それだけ駆込寺の力が弱くなつたということだ。そしてそれが幕府の基本的な方針であり、姿勢だった。

中世にあつた「公界」、権力不入の地であり、罪人もそこに入れば罪を追及されることなく、復讐の手ものがれられるアジール（隠れ家）であり、一切の租税を免除された自由の土地。封建領主にとって、これほど頭の痛い存在はなかつた。戦国から近世にかけて、あらゆる領主がこの問題と戦い、少しずつ少しずつ、抹殺して來たのである。

駆込寺はまさにこの古い「公界」の一種だったのである。

「文吉^{ぶきち}がもう出かけました」

八兵衛が答えた。

この御奉書を届けるために、東慶寺の寺役所には数人の飛脚が常駐している。文吉はその一人だった。

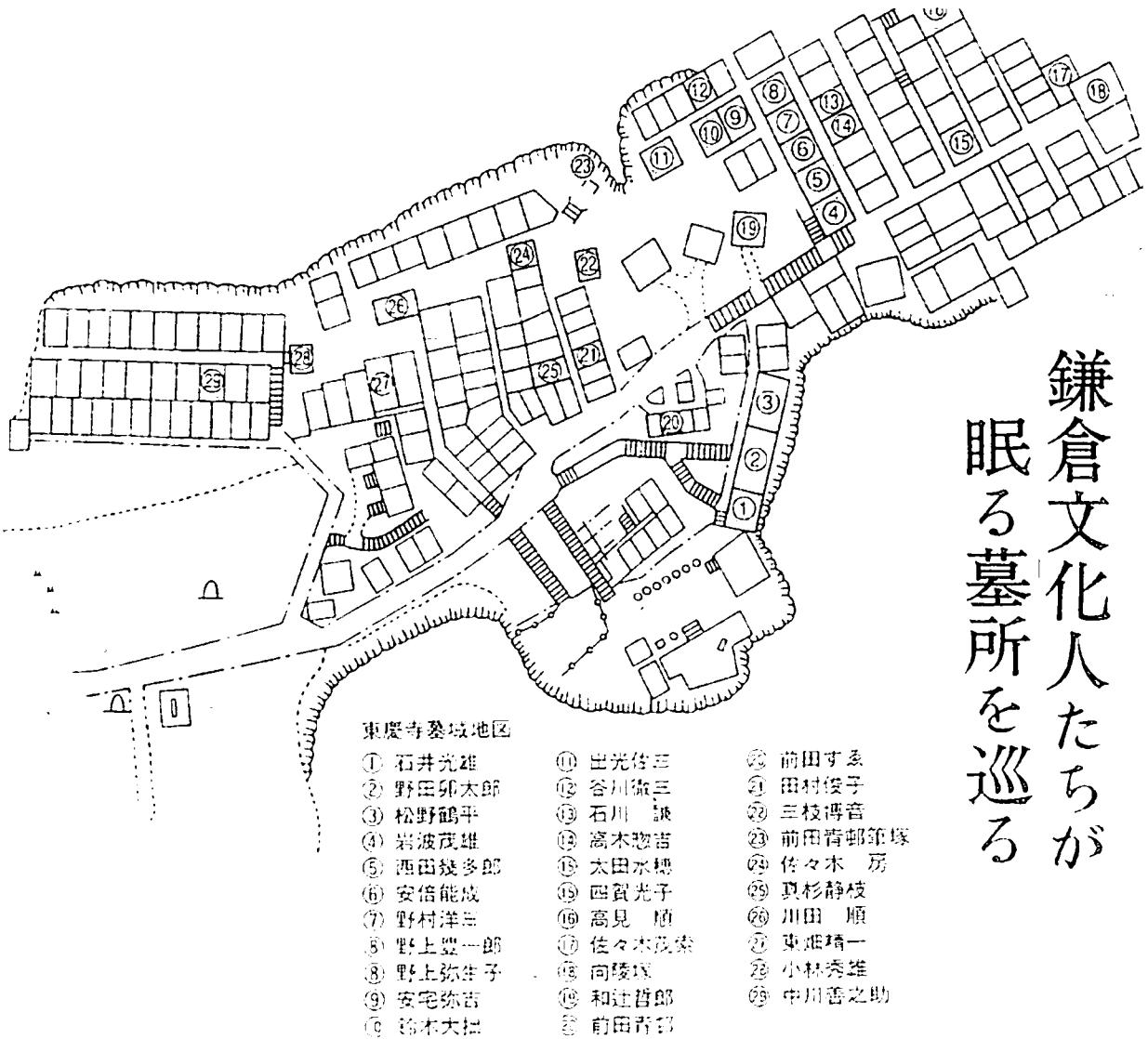
飛脚はどんな遠方の地でも御奉書を届けに行く。しかも事は急を要する。大体は必ず名主方に行って請書を貰い、里方、亭主方、仲人方と廻つて帰る。時には女の親や亭主同道で帰ることもあり、駆込女を送り届けることさえある。仲々大変な仕事だった。尚、この飛脚の費用は、受けた方で支払うきまりだった。

うめの草履が、石段の下から三段目に落ちている。

「草履がなんだってんだ!?」

「松ヶ岡へ来て、そんなことも知らないのかい。このお寺ではね、草履一つ、簪一本、石段の上に投げあげれば、それだけで駆込んだことになるんだよ。駆込んだ女はお寺のものんだ。婆婆の、それも男が、どうこうすることは出来ないのさ」

鎌倉文化人たちが 眠る墓所を巡る



しゃくそうえん 祀宗演 一八五九—一九一九年 明治・大正時代の臨済宗の僧侶。安政六年(一八五九)十二月十八日、若狭国大飯郡高浜村に「ノ瀬信典の次男として生まれる。十三歳で越渓守謙について出家得度、名を祖光、のち宗演と改め、积を氏とする。儀山善来・今北洪川に参禅し、洪川の法を嗣いで洪岳の道号を受ける。楞伽窟と称した。慶應義塾に学び、明治二十年(一八八七)卒業、セイロンに留学。帰国してのち円覚寺・建長寺の管長となる。その間、明治二十六年シカゴにおける万国宗教大会に出席し、あるいは満洲・歐米・インドに赴く。その門下に帰依するもの少なくなかつた。大正三年(一九一四)臨済宗大学の学長となる。同八年(一九二九)十一月一日寂。六十一歳。中興開山となつた東慶寺に葬る。『釈宗演全集』全十巻(昭和四年(一九二九)十五年)がある。

一 七里が浜のいそ伝い 稲村崎
名将の 剣投ぜし古戦場

一 汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり
愛宕の山に入りのこる 月を旅路の友として

七 歴史は長し七百年 興亡すべて
ゆめに似て 英雄墓はこけむしぬ

六 横須賀ゆきは乗換と 呼ばれておる大船の
つぎは鎌倉鶴が岡 源氏の古跡や尋ね見ん

八 建長・円覚古寺の 山門高き松風に
昔の音やこもるらん

九 北は円覚建長寺・南は大仏星月夜
片瀬腰越江の島も ただ半日の道ぞかし

(新訂尋常小学唱歌第六学年用・昭和7年)

(大和田建樹作歌「鉄道唱歌」明治33年刊)

○若い女性の雑誌「HANAKO」おすすめの小町通り・鎌倉みやげ

- ①梅花はんぺんと小判揚 井上蒲鉾店 梅花はんぺん一枚130円
- ②漬物 香寿庵 赤紫蘇茶漬け300円
- ③ワッフル わっふる21 ワッフル250円
- ④鳩サブレー 豊島屋 鳩サブレー5枚430円
- ⑤押し寿司 味くら 鮯寿司1本900円
- ⑥粟大福と百味せんべい 長嶋屋 粟大福130円
- ⑦玉子焼 玉子焼おざわ 玉子焼1箱1000円

—⑤と⑦はジルヌ店—

